

二 挨拶

私たちは、クラブ創立三十周年の記念事業として、ネパールに小学校を建てることを決め、実行しました。

建物のみを建てて寄付することは、ライオンズクラブでも可能です。しかし、これでは責任を取ったことにはなりません。その運営についてもアオーローしなければ、やがて学校は放置され、荒廃してしまつた例は沢山あるようです。

私たちは、このことを理解して、運営についても十年間は責任を持つこと。その間に村は自立を図り、以後の学校の経営に責任を持つこと。村の自立については、私たちも全面協力すること。以上の約束を村の長老たちと交わし、スタートしました。

そのために私たちは、「ネパール児童教育振興会」を設立し、他のライオンズクラブの協力を求め、広く市民のご支援を呼びかけました。このことによつて、私たちはもつと大きな可能性を手に入れることが出来たのです。

ところで、この子たちを小学校卒業で放り出すことが出来るでしょうか。彼らにとって、以後の教育を受ける機会は永久に失なわれるのです。私たちは、せめて中学校まで、更には二年間の高等部のクラスまで広げざるを得ませんでした。

次に私たちは、ニルマルホカリ村の振興に深く関与することになりました。

ネパールの農村は、全くの自給自足の生活で、村にはゴミ一つありません。また、年寄りと子供の姿しかなく、若者は出稼ぎに出て、その仕送りで生活を支える状態です。

子供の教育環境は劣悪で、畑仕事や薪拾い、子守りや家の手伝いで学校に行けないし、行きたくても学校が近くに無いといった状態です。恐らく、農村部における大人も含めた識字率は三割に満たないと思われれます。政治の怠慢そのもので、よその国の人間ながら怒りさえ感じます。教育で賢い国民をつくる以外にはありません。まさに「ネパール児童教育振興会」の出番です。会長の篠隈光彦は現在までに六〇回以上もネパールに足を運びました。全てについて彼の働きに負うところ大だったのです。

どうしたら村を、ひいてはネパールを豊かにすることが出来るか。何か輸出できる農産物を作るしかない、というのが私たちの結論でした。

色々模索した結果、コーヒー豆だったら日持ちするし、比較的栽培も難しくなく、しかも世界の需要は伸びている。コーヒーを村の産業として育てる。一からのスタートでした。現在一三年目です。コーヒーの収穫と日本への出荷は、徐々に軌道に乗りつつあります。

今後も様々な課題が横たわっていると思いますが、私たちは「ネパール児童教育振興会」を中心に取り組みを続けていく覚悟です。どうか引き続きのご理解、ご支援をよろしくお願ひ致します。

二〇一七年四月

福岡博多東ライオンズクラブ五〇周年実行委員会

ネパール児童教育振興会